

【追悼】

中村 茂夫 先生のご逝去を悼んで

本学会名誉会員の中村茂夫神奈川大学名誉教授が8月21日に78歳でご逝去されました。本学会の初代庶務幹事として学会設立当初から学会の運営にご尽力され、1977年のICTAC、1999年のCATS開催のご功績から2009年度に本学会名誉会員に推戴されておられます。本学会への多大なご貢献に感謝し、ここに謹んで哀悼の意を表します。

中村先生は高分子を対象に合成・物性の分野で活発に研究を続けられ、多くの論文・著書を発表されております。広く熱分析の手法を駆使され、熱機械分析や動的粘弾性測定の分野の第一人者として、本学会の講習会をはじめ多くの研究者・技術者の指導に当たられました。

先生は明るいお人柄で、毎回参加されたICTACやCATSをはじめ、高分子や繊維分野での国内外の学会において中心的な存在として活躍され、多くの研究者と交流されてこられました。ご一緒させて頂いたイギリスやコペンハーゲンでのICTACでの先生のお姿が懐かしく思い出されます。神奈川大学在職中は学内外の要職をされながら、毎年30名近くの卒研究生、大学院生に熱心に指導されておられました。活気あふれる研究室で、多くの学生に適切な助言を次から次へと与えられていた先生のお姿が今も目に浮かびま

す。また明快な判断力をお持ちで厳密な考え方をされる先生は、JISやISOなどの規格においてもそのお力を発揮され、数多くの制定や改正に関わられ、特にプラスチック分野ではTC61/SC5においてWGの主査を務められるなど多大なる貢献をされております。

先生が亡くなられた8月21日は先生がご尽力された35年前の日本での開催以来、2度目の日本開催となった15th ICTACの会期中でした。無事開催を見届けて頂けたものと信じております。週3回、リハビリに通っていらっしゃるって伺っていましたので、今回のICTACは無理でも、次の討論会ではお顔が見られるかなと心待ちにしていたところでした。まだまだご助言頂きたいことがたくさんありました。2003年のNo.3の巻頭言でお書きになったような会員のニーズに絶えずこたえて、時代の先端を歩んでいく学会であり続けるには、困難なことがたくさんありそうですが、是非学会の今後を温かく見守ってください。個人的にももっとたくさんご指導を仰ぎたいことがございました。最後にこれまでのご指導とご尽力に心からのお礼を申し上げ、先生のご冥福をお祈りいたします。

(神奈川大学 西本 右子)

小澤 丈夫 元会長のご逝去を悼んで

本会の元会長である小澤丈夫先生は、去る平成24年10月2日にご逝去されました。享年80歳でした。先生の熱分析の研究分野における偉大なご功績と本会をはじめとした熱分析・熱量測定学会活動への多大なご貢献に深く感謝し、ここに謹んで哀悼の意を表します。

小澤丈夫先生は、1932年横浜でお生まれになり、1951年に東京大学に進まれました。東京大学大学院では、故神戸博太郎先生のご指導のもと示差熱分析による金属セッケンのご研究に取り組みされ、熱分析実用化の黎明期からその発展にかかわってこられました。1957年に旧通商産業省電子技術総合研究所に入所され、以来30年、絶縁体、蓄熱材料、電池、高温超伝導体と高分子からセラミックスにいたるあらゆる材料研究に熱分析を応用されました。同時に、熱分析の理論および応用研究を通じて、現在の熱分析の基礎を構築されました。特に、1965年にご発表された熱分析による反応速度の解析に関するご研究は、“Ozawa Plot”や“Ozawa Method”として国際的に高く評価されています。1987年に、ダイセル化学工業(株)の筑波研究所長に就任され、電子材料や高分子に関する研究開発を推進されました。その後、1997年から5年間、千葉工業大学工学部の教授として教育研究に専念されました。ご退職後も、ご自宅で療養されながらも、多数の論文や解説をご執筆になっておりました。これら一連の熱分析に関する業績により、1981年Mettler Award (NATAS)、1994年Kuranakov Medal (Russian Academy of Science)、1996年TA Instruments Award (ICTAC)など、多数の国際的な学術賞を受賞されております。

ご研究の一方で、数多くの学術団体や政府委員会のメンバーとして、学術活動の推進に貢献してこられました。本

会では、発足当時から会員として、種々の役職を歴任され第19代会長をお勤めになりました。また、日本熱物性学会においても、1995年に会長をお勤めになっています。ICTACでは、1974年以来、Scientific Committeeのメンバーとして活躍され、1992年には会長に就任されました。この間、ICTAC組織の充実と拡大に大きな貢献をされました。今夏、大阪で開催されたICTAC15では、このご貢献により、Robert Mackenzie Awardをお受けになりました。師としてまた代表者として研究と学術活動を牽引していただきました。

先生の研究論文には、“rigorous”の語がたびたび登場します。小澤先生の研究に対するご姿勢を表しているものと思えます。一方で、国際学会などにご一緒させていただいた際には、私ども若輩を集めていただき、楽しいお話を聞かせていただきました。お料理がお得意とのことでした。

今年7月、ICTAC15で企画した特別セッションについてご相談の電話を差し上げました。ご療養中にもかかわらず、長時間にわたり今後の研究についてご指導いただきました。ICTAC15直前にご報告の電話をしたときには、細い声になっておられました。私の机の引き出しには、この25年間に小澤先生からいただいた多数の宿題の分厚いファイルが入っています。宿題の答えをお見せすることができませんでした。その一番上の暑中お見舞いとされた最後のお便りには、「ICTACには参加できません。残念です。皆さんによろしく。」と書かれておりました。測定手法をもとにした学会がどのように発展していくべきかのお教を深く胸に刻み、心からご冥福をお祈りいたします。

(広島大学大学院教育学研究科 古賀 信吉)